戦後の鬱屈した空気を笑いで吹きとばし、歩んだ

笹山敬輔さん

メンバーが次々に欠けていくなかで「ドリフとは何だったのか」徹底的に調査

高度成長期以降の日本で、笑いを通して大衆と向き合ってきたザ・ドリフターズ。2004年にリーダーのいかりや長介さん、20年に志村けんさんがこの世を去った。さらにショックなことに仲本工事さんも不慮の事故で先ごろ天に旅立ってしまった。日本近代劇研究の専門家、笹山敬輔さんがメンバーの実像とその時代背景に迫ったこの本は、ますます貴重な検証となりそうだ。

文・高山和久／写真・関勝行

それぞれ役割に徹し

——なぜドリフを題材に

物心ついて最初に面白いと思ったのがドリフ。成人して演劇研究をするなか、大衆芸能にも関心がいくようになり、舞台としての視点から『8時だョ！全員集合』を研究しようと。けれどメンバーが次々に欠けていくなかで『日本の戦後において、ドリフとは何だったのか』という大きなテーマで論じることにしました。私は〝全員集合〟をオンタイムで見られなかったので徹底的に調査。ドリフといえば、いかりや（長介）・志村（けん）の関係がメーンになりがちですが、加藤（茶）さん、仲本（工事）さん、高木（ブー）さんもそれぞれの役割があり、全体像を書きたかったんです」

——いかりやさんがリーダーとなり新生ドリフが再編成された

「当時メンバーだった小野ヤスシさんらが脱退、加藤さんだけが残ったが、あのとき天才肌でスター性のある加藤さんが残ったからこそドリフは国民的スターに上り詰めたんです。加藤さんは、与えられたものの何倍にも面白くして返す異能があり、優秀なプレーヤー。仲本さんも加藤さんを『笑いができるアイドル』と評していたぐらいです」

——志村さんは秀才型

「志村さんは研究熱心で笑いの引き出しの蓄積がすごく多い人。いかりやさんも『志村はひとりでも笑いがとれる』と才能を認めていた。志村さんはネタがつくれるというところも強みでした」

——いかりや・志村の確執が囁（ささや）かれたことも

「一生涯現役という意識でやっていたいかりやさんは『志村には負けたくない』」、かたや志村さんはいかりやさんを一度は否定してでも乗り越えなければいけなかった。師弟であり親子の関係、ライバルでもあったからです」

——〝全員集合〟は長寿のお化け番組に

「〝全員集合〟は50％超の視聴率を叩き出すも番組は半年間休止。再開後は、自分がドリフを守らなくてはと〝いかりや色〟を強くしていき、16年間で803回放送されました。晩年の志村さんは『俺たちが飽きちゃダメ。マンネリになるまでやり続けるんだ』と言っていたが、まさにそれがドリフのドリフたるゆえんだった。なにしろ志村さんはグループが荒井（注）さんの脱退でターニングポイントを迎えた際に加入した人材。とはいえ2年間は苦闘続き。やっと『東村山音頭』で人気に火が付き、今に至る人気につながったんです」

度量の大きさで永続

——ドリフは解散も分裂しなかった

「志村さんを押し立ててからは〝全員集合〟で志村さんがほぼ笑いを牽引。ドリフの笑いが変質した。志村さんは生前『人間つらいことがあっても、笑っていれば瞬間、そのつらさを忘れられる。そういう笑いをつくれれば十分。人に夢を与えようとか、エラそうなことは思わない』と。これがドリフであり、喜劇王志村けんだと思います　加藤さんは当時はまだ30代。『メンバーの誰がウケてもドリフはドリフだ』という相当な覚悟で脇に回ったと思う。そうしたメンバーの度量の大きさがグループを永続させたんですね」

——ドリフが5人として遺した功績は

「1990年代半ばの『ドリフ大爆笑』（フジテレビ系）で久々に5人全員の舞台コントが復活。ドリフのチームワークの笑いは健在でした。ドリフターズは大衆とともに戦後の鬱屈した時代の空気を笑いで吹きとばし、歩んできた。演劇史のなかでも大きな存在に位置づけられます」

笹山敬輔（ささやま・けいすけ）　1979年、富山県生まれ。43歳。演劇研究家。筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究科文芸・言語専攻修了。博士（文学）。専門は日本近代演劇。2013年、『演技術の日本近代』で「日本演劇学会河竹賞」奨励賞受賞。著書に『興行師列伝　愛と裏切りの近代芸能史』『昭和芸人　七人の最期』『幻の近代アイドル史　明治・大正・昭和の大衆芸能盛衰記』など多数。

ドリフターズとその時代
笹山敬輔
"完璧主義者"いかりや長介の演出術
「最後の喜劇王」志村けん
国民的爆笑グループ初の本格評伝

『ドリフターズとその時代』文春新書　968円税込

長く大衆の心性をつかんできたザ・ドリフターズ。著者は「日本人にとってドリフは何だったのか」と迫る。いかりや長介の青春時代を背景にメンバー加入の経緯を描き、お化け番組「8時だョ！全員集合」を舞台・演劇の視点から読み解く。国民をテレビの前に〝全員集合〟させたドリフターズの群像劇の幕が開く。

* * *

『ショパン・コンクール見聞録　革命を起こした若きピアニストたち』　青柳いづみこ著

表現力が体制を翻弄

〝今、日本で一番チケットが取れないピアニスト〟と言われる反田恭平が2位、前回大会も活躍した小林愛実が4位と、日本人の活躍で注目された、若手ピアニストの登竜門ショパン・コンクール。

本書はその第18回大会のレポートだが、いったい何が〝革命〟だったのか。コンクールといえば、審査員の好みや大会の基準に競技者の方が合わせ、気に入ってもらわなければ勝利できない。ところが今大会は反田、小林のみならず、上位入賞者がそれぞれ独自の表現を披露し、審査員やコンクールの価値観を揺るがした。体制側が若者に翻弄されるという画期的な出来事が起こったのである。

著者はピアニストにして文筆家ゆえ、各演奏者の論評は専門的で的確、かつわかりやすい。予選・本選の模様はYouTubeでも配信されているので、本書と動画でぜひ〝革命〟の様子を堪能していただきたい。

集英社新書・1012円（税込）

『近鉄沿線の近現代史』　三木理史著

新旧地図で変化分析

古代史のロマンあふれる大和路や伊勢神宮そしてリゾート志摩半島まで多様な沿線をもつ近鉄は、近年「ひのとり」や「しまかぜ」などの新たな特急列車で注目を集めている。

しかし、21世紀初頭までおなじみであったオレンジとブルーのツートンカラーの特急色に象徴されるように本書は、主にその時代までの近鉄沿線を描く。

他方近鉄は、大手民鉄の中でも広域型に分類され、路線は2府3県にまたがる総延長500ｷﾛﾒｰﾄﾙを超える路線網をもっている。本書では近鉄がそうした広域路線網を形成するうえで不可欠であった周辺鉄軌道の合併、統合に焦点を当てながら、その鉄道営業や多様な沿線資源の活用を明らかにし、特に路線と沿線の変化を新旧の地図の比較によって、また、新旧の写真を交えながら、単に読むだけではなく見る視点も加えて近鉄沿線の面白さを浮き彫りにする。読者をワクワクさせる本である。写真・図85枚入り。

クロスカルチャー出版・2200円（税込）

『忘れる脳力　脳寿命をのばすにはどんどん忘れなさい』　岩立康男著

「忘却」の神秘に迫る

タレントの名前を思い出せない、記事を読んでもすぐに忘れる…。加齢につれ、こんなもどかしい思いを経験する方も多いのではないか。だが、最新の脳科学が明らかにしたのは、「脳は記憶を積極的に消すための機能を持っており、記憶を消すために多くのエネルギーを使っている」という事実である。実は、不必要な記憶をきちんと忘れることこそが、脳機能を高め、新たな記憶を取り込んでいくために最重要なのだ。

この本の前半では、記憶と忘却のメカニズムを解説。記憶がどのように作られ、忘却がどのようにして行われるのか、その神秘に迫る。そして後半は、記憶との向き合い方を解説する〝記憶のトリセツ〟となっている。本書で紹介する数々の事実は、忘れへの向き合い方を180度変えてくれるはずだ。最近忘れっぽい、記憶と忘却について知りたい、そんな方におすすめしたい1冊。

朝日新書・891円（税込）

ビジネス川柳

素面でも　酔ったふりする　処世術
（横浜市・戦海）
相手もさる者、お互い素面で芝居合戦

医師までも　キーを叩いて　患者見ず
（京都市・小林忠直）
病気はパソコンの中で起こってるんじゃないっ「

投稿のお願い　★はがきで★100　8160夕刊フジ報道部　ビジネス川柳係★住所、氏名（雅号）、職業、年齢、電話番号を明記★掲載作品には薄謝★月～金曜掲載。どしどしご応募ください